

## 『ソフィーの世界』

### —— 翻訳の倫理 ——

湯 田 豊

わたくしの手許に『ソフィーの世界』という書物がある。『ソフィーの世界』は、「哲学者からの不思議な手紙」という副題を添えて、1995年にドイツ文学者の池田香代子さんによって日本語に翻訳された。この書物を監修したのは須田朗氏〔中央大学教授・哲学〕である。『ソフィーの世界』は、1991年にノルウェーの作家、ヨースタイン・ゴルデルによって書かれた。この書物のオリジナルは、言うまでもなく、ノルウェー語である。Sofies Verdenが原題である。わたくしの関知する限り、Sofies Verdenはノルウェー語から直接ドイツ語に翻訳されている。フランス語訳もそうである。『ソフィーの世界』の英訳も、恐らくノルウェー語から翻訳されたものであろう。ところが、日本語訳はノルウェー語からの翻訳ではなく、ドイツ語から重訳された。池田香代子さんは「訳者あとがき」において「最初に池田が、おもにドイツ語版によって訳しましたが、・・・ノルウェー語版も参照しました」と書いている。彼女は英米の二種の

英語版と同時にノルウェー語版も参照したと言う。しかし、“英語版”と“ノルウェー語”を混同すべきではない。『ソフィーの世界』のオリジナルはノルウェー語であり、この書物を、翻訳者はノルウェー語から、直接、日本語に翻訳すべきであった。

現在、多くの人々は原典を読む代わりに翻訳を読まざるを得ない。われわれは、あまりにも翻訳に依存している。そういう状況においては、翻訳者の責任は重大である。翻訳者の使命は、オリジナルに忠実に原典を現代語に翻訳することである。『ソフィーの世界』をドイツ語から日本語に重訳することは、“翻訳の倫理”に反する行為であると言わざるを得ない。オリジナルに忠実に原書を現代語に翻訳するのが“翻訳の倫理”である。ノルウェー語で直接『ソフィーの世界』を読めない読者—恥ずかしいことに、わたくしもそのひとりだ—は、この書物の作者の声を聞きたいと思う。作者の息吹きを、読者は感じたいと思う。『ソフィーの世界』の翻訳者は、作者の声を言語の障壁を越

---

えて読者に聞かせる責任を負っている。

『ソフィーの世界』の日本語の翻訳に関してわたくしがショックを受けたのは、本書が重訳だということである。いや、それよりももっとわたくしがショックを受けたのは、日本語版がノルウェー

語からの忠実な翻訳でないということを問題にする人がいないという事実である。いやしくも人文研究に携わる人は、“翻訳の倫理”について深く反省すべきであろう。倫理的であることは、人間的であろうと欲することでもある。